

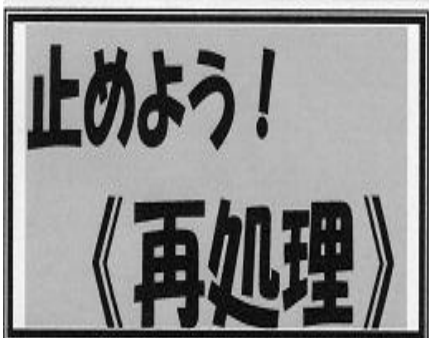
**三陸の海を放射能から守る
岩手の会**

(略称) 三陸の海・岩手の会

郵便振替 02240-5-102650

ホームページ《再処理/岩手の環境》

http://sanriku.my.coocan.jp/
《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》

2014(平成26)年

10月7日

第146号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

空間線量率、自然の約260倍 (13 μ /h)



地表計測では47 μ Sv/h

：事故原発から約2.5km地点

(大熊町内)

**【岩手土壤放射能汚染マップ】
測定班有志の報告**



上 双葉町の倒壊寸前の家屋。繁茂する雑木、剥がれた落ちた瓦。

右 車載サーベイメーターの空間線量と地表計測値との比較(双葉町)



『土壤プロジェクト・いわて』の測定班の有志が、福島原発事故による放射能汚染地域(帰還困難区域など)に入り、現地視察と空間線量率測定を行いました。本年二月、市民参加によって岩手県内約三〇〇地点の土壤を測定し『岩手土壤放射能汚染マップ』を完成させたチームです。その報告文が寄稿されましたので掲載します。予想以上に強い放射線と放置され荒れ果てた家屋など心痛む現状です。政府が進めている安易な帰還計画の強行は、無用な被ばくを強い、被災者を一層苦しめるものであることが分かります。

去る九月一日に福島県南相馬市から、高濃度汚染地域(浪江町、双葉町、大熊町)に行く機会を得ることが出来ました。

**測定を開始したとたん
0.1 μ Sv/h**

今回はGPS連動サーベイメーターによる空間線量率の計測も行いました。南相馬市原町付近で測定を開始したとたん、すでに車内0.1 μ Sv/h、車外地表0.3 μ Sv/h、車外地上1mでも0.2 μ Sv/hを観測し、そこから南下するにつれ徐々に数値が上がってくるという状況で、自分が住む岩手県とは比較にならないほどの放射能汚染であることが実感されました。

帰還困難区域の惨状

帰還困難区域へは浪江町の幾世橋スクリーニング場より立ち入りしましたが、ナンバーが着いたまま置き去りにされた車両、雑草が伸び放題の宅地、家屋によって倒壊しそうになっているところもあり、人の気配は全くせず、ただただ

被ばくを強いる帰還計画に反対

だ呆然となります。その街の在りようは、放射能汚染の脅威を感じるには十分過ぎるものがありました。

原発を目の前にメーター振り切れ、現在も放射能放出か

帰還困難区域内の汚染調査では、車内計測平均でも0・5μSv/h以上、大熊町の六号線沿いでは区間により5μSv/h以上、六号線より外れた原発の見える場所では、車のドアを開けた途端に計測不能の9・999μSv/h以上、同場所別の計測器（Inspector+）による計測では14μSv/h、地表では47μSv/h、地表では47μSv/hという驚異的な数値を観測し、とても恐ろしく感じました。

双葉町に戻つての計測では、建屋の内部空間でも1μSv/hを超え、地表では4〜5μSv/h、同場所の固定計測時には突然の線量値上昇があり、今でも原発から放射能が放出され

ているのではないかと思いました。

許されない放射能汚染の軽視、隠蔽

今回の事故では、本当に多くの人々がふるさとから離れることを余儀なくさせられ、望まない避難生活を強いられ、さまざまな苦難を抱えながら生活しています。しかし、そのような実情がありながら政府やメディアは「基準値」や「風評」などという言葉を使い、原発事故被災者の立場すら利用して放射能汚染を「正しく」恐れることが必要であり、脱原発の声を挙げている人達があたかも被災地の復興と平穏な暮らしを妨げているというイメージを持たせ、多くの市民に根拠のない安心安全を押し付けようとしているように感じました。

私達は、今回訪れた放射能高濃度汚染地域を実際に調査し測定してみ、未だに高い放射能数値が出ており、その危

険な現実には、甘い期待感からの判断を許さず、危険な事態は直視すべきと痛感しました。

根深い「原発安全神話」の現実

今回現地を双葉町出身の方に案内して戴きました。その方さえ、地震直後に原発が壊れるなど想像すら出来なかつたそうです。

故吉田昌郎・福島第一原子力発電所長が就任当時、あいさつに近隣に配ったという団扇には『プルサーマルで安心な発電』とありました。同じ誤りを繰り返すな

仮りに今回が「半天半人」の事故であつたとしても、再度同じことを繰り返せばそれは人災と言えるでしょう。この事故を教訓に、今後これ以上広大な大地と平穏な生活が奪われ、無用な悲しみや争いを招かないためにも、今こそ多くの声で脱原発を目指し実現しなければと改めて思いました。

（菅原和博 記）

原発事故被災者の声に

耳を傾けよう



DAYS
福島原発事故後の生活・子どもの健康
福島の母
440人の証言集

「DAYS JAPAN」
二〇一四年八月号別冊は
福島の被災者の母達のアンケート特集号です。抜粋し掲載します。
（DAYS JAPAN編集部
の許可を得ました。）

同書からの抜粋

「子どもを抱えて」

◇三月一二日は食品の買い出しに行き、スーパーの外で子どもと一緒に三〇分程度並んだ。（郡山市、4歳、2歳児の母、埼玉県に避難）

◇自宅が全壊したため家の荷物を外に運び出していた。娘は二歳でマスクをしていることが出来なかつた。一週間もしないうちに保育園に通い始めた。（郡山市、2歳児の母、新潟市に自主避難）

◇一三日の爆発までは屋外で散歩していた。二本松に在る間（一三〜一四日）水、飲料、オムツなどの買い物のため、店外で一〜二時間並んでいた。（会津若松市、5歳、1歳児の母、転居を決断）

◇「事実を伝えよう」
パニックを恐れて真実を隠し続けた初期対応は、その後の全ての信頼を崩すという大変な事態を引き起こしました。国民を愚民扱いしていると怒りを感じます。国民に真実を伝え、選択させるしかなかったのに。（二本松市、2歳児の母）

◇「不安をいっばい」
我が子も一歳でしたが、一番危険だと言っておきながら検査もなく安全宣言。何のフォローもなく、今後何か症状が出てても事故とは無関係と言われる

◇「子どものための制度を」
子どもだけでも福島県を避難区域にするべき。避難区域にならないから夫や夫の母と避難についてぶつかり合うことが多い。（1歳児の母、郡山市、新潟、大阪、大分に自主避難）

◇先日の甲状腺検査で心配ないと言われましたが、のう胞が6個ぐらいあるとのこと。進行していないか不安です。（1歳児の母、東京に1ヶ月自主避難）

◇「子どもだけの制度を」
子どもだけでも福島県を避難区域にするべき。避難区域にならないから夫や夫の母と避難についてぶつかり合うことが多い。（1歳児の母、郡山市、新潟、大阪、大分に自主避難）

◇生涯の健康診査、医療費の拡充、検査体制の強化。一生です、一生。（3歳、5歳児の母、いわき市、埼玉県に自主避難、転居）

◇避難する権利を認めてほしい。避難出来ない子どものために保養を制度として確立してほしい。（9歳児の母、郡山市）